

唐話の伝播と変化

——岡島冠山の果たした役割——

奥村佳代子

The Spread and Change of the Towa

— Okajima Kanzan and the task he has accomplished

OKUMURA Kayoko

The first of this article is discuss the relationship between the way of accepting Chinese and the object of learning in the Edo era, and second to analyze the language of each document.

There were two ways of contacting Chinese in the Edo era; direct and indirect. Both direct and indirect contact have the data of Chinese conversation. The third purpose of this article is to point out the task of Okajima Kanzan from the different and common points of each data.

キーワード：中国語 外国語学習 接触 唐話纂要 唐話使用

はじめに

江戸時代の日本は鎖国政策が敷かれ、一般の日本人には外国人との接触の機会はなかったことが、逆に海外の情報や文化に対して強い興味と関心を抱かせ、彼らの好奇心を刺激し、なかには同時代の中国語を学習しようとする者もいた。当時の日本人が当時における「現代中国語」に接する状況には、直接的な接触と間接的な接触という二つのパターンがあった¹⁾。直接的接触とは、長崎唐通事を中心とした中国との貿易に関わる日本人と来日中国人との間に発生したものであり、間接的接触とは、中国人との直接の接触ではなく、日本人（唐通事を含む）や書物を媒介に発生したものである。直接的な接触、間接的な接触ともに、中国語を学ぶという行為を引き起こす要因ともなり、実用的な会話が記述された文献と読まれることを目的として翻訳、創作された文献とが、それぞれに遺されており、日本人がどのような中国語を話し、記述したか、また日本人がどのような中国語を学んだのかを知る手がかりを与えてい

1) 本論で中国語という呼称を用いる場合は、それぞれの時代における現代中国語の意味で用いる。

る。

本論は、直接的に接触した中国語と間接的に接触した中国語との違いを、語彙の面から整理し、江戸時代の「唐話」というものの中身が均質ではなかったことを改めて提示したい²⁾。対象とする資料は、以下の3点である。

『譯家必備』³⁾ (直接的な接触による中国語, 唐通事による中国語)

『唐話纂要』⁴⁾ (間接的な接触による中国語, 岡島冠山による中国語)

『唐話使用』⁵⁾ (間接的な接触による中国語, 岡島冠山による中国語)

上に挙げた3点の資料の共通点は、伝統的な中国語の書面語で書くことが前提とはなっていないという点である。

まず、中国人に対して用いられた唐通事の唐話と、おそらく中国人に対して用いられることのなかった、日本人が学んだ唐話が記述され出版された最初の書物である『唐話纂要』とを比較する。

1. 会話形式の中国語に見られる相違

1-1. 直接的接触による中国語

唐通事は、公的に中国人と話す機会を持ち、中国人との会話を中国語で成立させていた。江戸時代の日中貿易に不可欠な存在であった最大の理由は、中国語を話すことができたからである。

『譯家必備』は、唐通事が書き残した中国語資料であり、唐通事としての仕事が主に会話形式で記述されている。記述年代や書写年代は記されていないが、多く1750年代の事実に基づいているため、1750年から1760年頃の中国語資料であると考えられる⁶⁾。そこに記述された会話は、唐通事同士あるいは唐通事と中国人の会話である⁷⁾。

唐通事の中国語はどのように記述されているのか、代詞、疑問詞、語気助詞を含む例文から見てみたい。

2) 「唐話」は江戸時代に中国語を指す呼称として用いられたが、唐通事が自らの口頭中国語を指して唐話と言った言葉と、岡島冠山が『唐話纂要』の中で示した唐話とは、木津祐子氏の一連の研究が示すように、異なるものである。筆者は『江戸時代の唐話に関する基礎研究』(関西大学出版部, 2007)で、「狭義の唐通事」と「広義の唐通事」という表現で、唐通事(狭義の唐通事)の唐話と岡島冠山(広義の唐通事)の唐話の違いを述べようと試みたが、岩本真理氏によって「狭義の唐話」「広義の唐話」と端的に表現されている。これらの先行研究を踏まえ、本論では、具体例を挙げて江戸時代の唐話の実態の一端を示すことを目的とする。

3) 長澤規矩也編『唐話辞書類集』第二十集(汲古書院, 1976)を使用する。

4) 同上第六集(汲古書院, 1973)を使用する。

5) 同上第七集(汲古書院, 1974)を使用する。

6) 書かれた内容は、書かれた時代と一致するものではないが、唐通事の仕事が中国語で記述しており、唐通事が中国語と仕事内容を学ぶことを目的に書かれたのだとすれば、同時代の出来事を当時の言葉で記したのではないかと推測する。

7) このことは、記述されている中国語が、中国人との会話に十分に耐え得るものであったことを意味している。

1-1-1. 唐通事の中国語⁸⁾

「我」據我看來，目今後生家乖巧得狠。

「你」你看，這樣面孔紅了。

「汝」總管，汝去查查。

「他」他陳三官一周遭帶小弟轉一轉，領教過許多事情，樣樣都明白了。

「我們」我們也有時節走過牆外沒有看見那箇旗。

「你們」你們眾人聽告示，留心聽聽。

「爾們」爾們走到船尾來。

「爾」昨晚我到了年行司那裡，替爾眾位爭論。

「他們」晚生也是同他們一起開到了舟山地方。

「這」這地方好乾淨。

「這箇」這箇池塘上為什麼造起臺子。

「此」家父本該帶小弟進館，因為早間王府裡有字兒叫，諒必此刻還在王府裡辦什麼公事。

「這裡」這裡一帶幾間庫都空了，為什麼沒有人住呢。

「這樣」老爹這樣說，小弟要躲避了。

「那」那一天冒夜到郊外去送行，感冒了風寒。

「那麼」在那麼地方燂洗。

「是個」是個次椅楠這一宗二套，除了這箇價，在沒有加了。

「什麼」這什麼緣故。

「何」這箇為何到于今還沒有宰呢。

「幾」這箇對聯都好。

「幾時」這箇幾時造起來。

「那」這箇我不信，年裡頭不過一兩會的戲，那有這樣大受用。

「麼」天后宮也有香公麼。

「罷」既是這樣說，遞過酒壺來，小弟自己篩一杯吃罷。

「了」老爹這樣說，小弟要躲避了。

「罷了」就是這樣罷了。

「呢」這裡一帶幾間庫都空了，為什麼沒有人住呢。

唐通事の会話の相手である中国人の中国語は次のように記述されている。

8) 代詞、疑問詞、語気助詞としての使用が明らかで、かつ繰り返し用いられている語を挙げた。ここに挙げなかった語に「於彼朝陽」があるが、「彼」が独立して使用されるものとは見なさないという理由による。また、用例を挙げた「汝」「是個」「箇麼」「何」の使用回数は限られており、『譯家必備』の唐通事が使用する基本的な語であったと見なし得るほどには用いられていない。

1-1-2. 来日中国人の中国語

「我」據我看來，目今後生家乖巧得狠。

「你」新老爹進來了，晚生陪你走走。

「他」他寫的端楷，皆是字體端正的狠。

「我們」我們在外頭，照一樣的做人是罕得見。

「這」這那里使得。

「這箇」這箇最好了。

「這樣」既然這樣，晚生們也信服了。

「這裡」這裡走過幾條街會到麼。

「那」老爹看，那正面的牌匾，環帶共欽的四個大字，好不好。

「那箇」那箇不算什麼菩薩。

「什麼」有什麼貴恙。

「為什麼」令尊今日為什麼不進來。

「那」老爹府上在那一條街。

「幾」有幾位昆仲。

「那里」老爹說那里話。

「那裡」不然那裡管得到。

「麼」館裡有戲子麼。

「了」自己不敢用，所以帶到這裡來供養菩薩的了。

上に示した唐通事と来日中国人による中国語は、両者に大きな違いや言葉遣いの差異は見られない。「此刻」や「幾時」は、現代中国標準語（普通話）の標準的な語であるとは言えないが、彼らが話す言葉として記述された中国語は、現代中国標準語の知識で十分に理解することができる。

1-2. 間接的接触の中国語

唐通事以外の日本人は間接的に中国語と接触した。中国人と直接中国語で会話する機会を持たなかった日本人は、日本に帰化した中国人や中国語が堪能な日本人に中国語を習った。彼らが中国語を学ぼうとした動機のひとつに、中国語で書かれた書物を中国語で読むため、ということがあった。荻生徂徠が中心となって結成した訳社での中国語学習も、中国語で自在に会話することを目指したのではなく、書物を読み解くことを最終的な目的としていた⁹⁾。『唐話纂要』は、訳社での中国語教授と学習のひとつの成果であり、長崎出身の岡島冠山（1674-1728）が訳社の講師を務め、本書を編纂した。『唐話纂要』は「唐話」が漢字と音を表すカタカナとで記述されて、出版された最初の書物であり、生身の中国人や中国

9) 木津祐子「『崎陽の学』と荻生徂徠——異言語理解の方法を巡って——」（『日本中国學會報』第六十八集，2017）に、「荻生徂徠は、「古文辞」を黙読により習熟し、それを「自らの手指から」再生することによって、古言と一体化しようとした。」（149頁）とある。

語と関係のなかった日本人であっても、本書を通じて唐話とはどのようなものであるかを知ることが出来るようになった。また、中国語に直接接することのなかった日本人にとっては、『唐話纂要』の唐話こそが中国語だったと言える¹⁰⁾。したがって、本論では『唐話纂要』の唐話（すなわち中国語）は、日本人が間接的に接触した中国語を代表するものとして見なすこととする¹¹⁾。

1-2-1. 『唐話纂要』 卷四「長短話」の中国語

『唐話纂要』は卷四の「長短話」に29の会話が収められている¹²⁾。その会話で用いられている言葉は次のような中国語である。特に代詞、疑問詞、語気助詞に着目して例示する。

「我」我今日可的有件事，不敢從命了。

「你」你今日有什麼事故麼。

「爾」我聽說爾近來學業大進，而詩也做得好，文也做得妙。

「他」令郎若要娶他，果然金玉夫妻

「我們」且請用寡酒，與我們添些高興。

「我每」今日我每寂寞無聊¹³⁾。

「你們」你們面添五分春色，呢呢喃喃說什麼話。

「這」這都是先生屋裡去請教的哩。

「這般」先生緣何這般說。

「那」自然要來作半東，把平生本事使出來，勸倒那些客人便了。

「那裡」若在那裡飛盃花間求興醉中，胡乱做詩耍子，卻不是一場大消遣了。

「那首」先生若有經我那首，則順便到寒舍見家父也好。

「之」聽說海面上的船隻，或者打壞的，或者漂流的也有之。

「此般」走船的人原來重利輕命之徒，而未必免此般災禍。

「是個」雖則是個，不意遇了暴風，送掉了性命者，委實沒造化。

「恁地」爾尚青年怎恁地大奇。

「什麼」長兄你這幾日有什麼緊要事。

10) 「唐話」とは、本来は木津祐子「唐通事の心得——ことばの伝承——」（『興膳教授退官記念中国文学論集』，汲古書院，2000）の指摘にあるように、岡島冠山や荻生徂徠の唐話学とは別に存在した唐話を指し、職業の言葉であり祖先の言葉であった。唐通事は自らが話す中国語を「唐話」と称した。

11) 岡島冠山（1674-1728）は、同姓同名の人物が『唐通事会所日録』に記録されているため、内通事だった可能性も考えられるが、決め手に欠けるため、今のところは江戸や京都では中国人並みの中国語を操る人物としてその中国語能力を高く評価された人物であったと言うに止めておく。『唐話纂要』をはじめとする一連の唐話の書物や水滸伝の訓訳及翻訳の出版など、岡島冠山は確かに当時の学術や文芸に影響を与えた人物であった。

12) 卷一から卷三も会話の言葉と見せる文や、会話の一部にもなり得る語や語句があるが、2人の人物によるやりとりであることが明らかな卷四「長短話」を完成した会話文と見なし、『譯家必備』と比較する。

13) 『唐話纂要』の中国語の後に付された日本語には、「我輩」とあり、複数形としての使用ではなく、謙称としても用いられている。

「何」長兄你何其太疑。

「焉」焉能如此哉。

「怎」前日所約的事，怎沒有回音。

「怎的」若伏事主公有餘力，則不管怎的便在空中地裡跳出來，或走馬射弓或刺鎗使棒。

「怎生」這兩日你怎生久不來。

「怎麼樣」未知還是怎麼樣。

「多少」近來有多少武夫弓馬熟閑，兵法精通者。

「了」其實非同小可了。

「哩」我落得滿腔快活起來哩。

「耳」恐不足爲對耳。

「麼」不知令郎令愛一向都好麼。

「否」未審興居無恙否。

「矣」庶幾聖人之道矣。

「焉」日後興頭預先可知焉。

「則個」你若沒事，必須過來替我做半東，勸客人多喫兩盃酒則個。

他に、代詞「此」、疑問詞「幾」、語気助詞「也」が用いられている。上に挙げたように、代詞、疑問詞、語気助詞に、『譯家必備』とは異なる語が含まれていることが見てとれる。また、現代中国語と同じ語も用いられているが、現代標準中国語では用いられない語も含まれており、語彙が豊富であると言えることができる反面、話し言葉と書き言葉の区別なく用いられているとも言えることができる。ただし、書き言葉を制限なく使用しようということではなかったことは、『唐話纂要』巻六の「和漢奇談」で用いられる代詞、疑問詞、語気助詞との語彙の違いを見れば明らかであると言えるだろう。「和漢奇談」は、『唐話纂要』の初版にはなく、初版から3年後巻六として新たに加えられた部分であり、長崎を舞台として創作された読み物である¹⁴⁾。「和漢奇談」に用いられている人称代詞は「我」「吾」「俺¹⁵⁾」「汝¹⁶⁾」「彼」「爾等¹⁷⁾」、指示代詞は「此」「彼」「其」「之」「斯」「是」「焉」、疑問詞は「誰¹⁸⁾」「孰¹⁹⁾」「伊²⁰⁾」「何」「奚」、語気助詞は「耶」「否」「也」「哉」「耳」「焉」「矣」「乎」「爾」である。巻四「長短話」の会話と「和漢奇談」の読み物との語彙の違いは明らかであり、『唐話纂要』の編纂者や読者にとって、会話で用いられるべき語彙と、読み物で用いられるべき語彙とが明確に区別されていたことを示している。『譯家必備』の

14) 「和漢奇談」として収められているのは「孫八救人得福事」「徳容行善有報」の二編である。実在のモデルや参考にした作品が存在した可能性はあるが、現時点ではよくわからない。

15) 「孫八救人得福」の孫八のセリフでのみ用いられている。

16) 孫八の夢の中で孫八に対してお告げをする「一官人」の孫八に対するセリフでのみ用いられている。

17) 「徳容行善有報」の媽祖娘娘のセリフで一か所のみ用いられている。

18) 「孫八救人得福」の孫八のセリフに一例のみ用いられている。

19) 「徳容行善有報」の徳容のセリフに一例のみ用いられている。

20) 「孫八救人得福」の孫八のセリフに「伊處」が一例のみ用いられている。

会話の語彙との違いは大きいですが、『唐話纂要』の会話の語彙もまた、会話にふさわしい語彙として選ばれていると言える。ただ、会話にふさわしい語彙の基準が、『譯家必備』とは明らかに異なっている。

1-3. 直接接触の会話と間接接触の会話

『譯家必備』の語彙と『唐話纂要』巻四の語彙は異なっているが、いずれも会話形式である。唐話は、本来は唐通事が自分の話す中国語に対して用いた呼称であり、唐話とは口から発せられた言葉だった。この意味においては、『唐話纂要』巻四の語彙が異なるものであったとしても、唐話は口から発せられた言葉であるという認識が、会話形式に反映されていると言える。

『譯家必備』と『唐話纂要』巻四の形式上の一致は、唐話が唐通事と中国人によって構成されていた世界から、岡島冠山によって日本人だけの世界に伝えられた時点では、本質的には変化しなかったということであり、唐通事にも岡島冠山にも唐話とは話される言葉であり会話であるという共通の認識があった。

しかし、『唐話纂要』の会話は、実際には口頭で話された言葉が記述されたものではなく、日本人の話す言葉としてふさわしく造り出されたものだった。『譯家必備』の語彙との隔たりがより大きい「和漢奇談」は、『唐話纂要』初版3年後に特に付け加えられた部分である。「和漢奇談」は会話形式ではなく、一種の小説であり、口で発せられるものとしてではなく、目で読むために書かれたものである。「唐話」と題する書物に読むための「和漢奇談」を含めたということは、ここに唐話認識の一種の変化が生じたと考えられる。つまり、唐話には話される言葉以外の言葉も含まれるのだという認識の変化である。認識の変化は同時にまた語彙にも大きな変化をもたらしており、唐話が書き言葉としての一面をも含み持つこととなった²¹⁾。

2. 『唐話使用』の会話文

『譯家必備』と『唐話纂要』の会話文の文例と、代詞、疑問詞、語気助詞を見るかぎり、唐通事と中国人との間で話されていた中国語と、日本人が会話として学んだ中国語とは異なっており、『唐話纂要』には、『譯家必備』に見られない語を確認することができた。次に、『唐話使用』の会話文から、中国語の会話つまり唐話がどのように記述されているかを見よう。

『唐話使用』は、外題は『唐語使用』、序文にも「唐語使用序」とあるが、本文中各巻頭は巻三を除き「唐話使用」と記されており、本論は『唐話使用』の書名を用いる²²⁾。『唐話使用』は岡島冠山の編纂によるが、刊行は冠山の死後の1735年である。『唐話使用』もまたすべての漢字に音を表すカタカナが付されており、会話形式は全六巻中巻四から巻六までを占め、話者や場面によって、次の十種類の会話場面に分類されている。

21) 書き言葉が含まれるという点においては、『唐話纂要』巻四の語彙に見られる書き言葉の要素は、すでに変質の萌芽であったと言えるかもしれない。

22) 『唐話辞書類集』の編纂者であり解題著者の長澤規矩也氏も『唐話使用』を用いている。

卷四 「初相見説話」「平日相會説話」「諸般謝人説話」「望人看顧説話」「諸般借貸説話」

卷五 「諸般賀人説話」「諸般諫勸人説話」「諸般讚歎人説話」「書生相會説話」

卷六 「與僧家相會説話」

『唐話便用』の会話文は、上に示した場面が設定されたことによって、『唐話纂要』よりも親切で充実した内容となったと言えるだろう。また、話者が自身と相手に対して代名詞だけでなく、互いの立場に応じた呼称を用いていることから、二者がどのような関係にあるのかが示されている。ここでは、このような情報量の多さを活用して、使用語彙についても場面ごとに提示する。以下に挙げる表は、十場面ごとの代詞、疑問詞、語気助詞を示している。該当する語が用いられていない場合は空欄のままにしている。一組の会話は、二者のそれぞれ一回の受け答えから構成されており、上下に分けて提示し、場面ごとに番号を付した。

「初相見説話」

	呼称	代詞	疑問詞	語気助詞
1	小弟			
2	先生 老夫 仁兄		何幸在此 何足掛齒	
3	兄長 小弟	如此		了
4	足下	我 我等		
5	小弟	如此	何	
6	仁兄 小可 仁兄	其便 彼此 從此		

「平日相會説話」

	呼称	代詞	疑問詞	語気助詞
1	小弟 小弟 兄長	這幾日 個裏		
2	我	這兩日	那	
3	小弟	我 你 我 這件事	怎生	了
4	老爺	你 我 我	怎	了
5	小弟 仁兄	我 你 這幾日 這裏 我		
6	賢弟 小弟 兄長	我 你 我		

7	小人	他 這幾日		
	老夫	如此		
8	先生 小人	我們 我每 ²³⁾ 他 這幾日		則個
		我 你們 這個戰事		

「諸般謝人說話」

	呼称	代詞	疑問詞	語気助詞
1	小弟			
		如此	何必	
2		那日		
3	仁兄		何勝感佩	
	先生	我 之	何須何	
4	仁兄	那件事		了
	小弟 兄長			
5	小弟 兄長			
6		我 你 這也是 這件事 其中	何消	
	小弟	因此		
7	老夫	依之看來 如此	安	
	小弟	這幾日		
8	小弟 仁兄	如此	何足齒及	
		你 我 到此		
9	晚生 老爺	此	何	
	小弟	此職		
10	足下	我 之 如此	幾句	
	小弟 老爺	此陸進		
11	足下 老夫	我 如此	何	了
	老兄 小弟	那一件事 其美 此	何	
	小弟 仁兄	其美	何 何等	

「望人看顧說話」

	呼称	代詞	疑問詞	語気助詞
1	小弟 老爹	如此		
	賢弟	你		了
2	仁兄	僕 我		
	老兄 小弟	我 你 他們 這裡 這幾日 如此	幾個人 甚	罷了
3	小弟 長兄	這個地位	多少錢財	
		我 你 如此 若斯	何足 安	哉

23) 「我每」は「這幾日弄得我每晝夜慌忙。」という文に出て来る。「每」は「我」の複数形ではなく、後の「晝夜」に掛かっていると考えることも可能だが、『唐話使用』の訓点に基づくと、「每」は「我」に付くものとして用いられている。

「諸般借貸說話」

	呼称	代詞	疑問詞	語氣助詞
1	小弟 仁兄	我 這年邊 此		苦極了
	足下	我 如此		便了
2	小弟 老爺			
	足下 老夫	我 如此		
3		我 你 這早晚 這頭銀子		
		我 你 這 這時候 這閑銀子 這般說 這樣	那家 甚麼話	便了
4	小弟 仁兄	這幾日		
	兄長 小弟	就此奉上		
5	仁兄	我 這話 那座別庄 此		
	小弟 仁兄	那一所庄院		

「諸般賀人說話」

	呼称	代詞	疑問詞	語氣助詞
1	仁兄			
	小弟			
2	足下			
	小弟			
3		這幾日	奈何	
			何足言賀	
4			何足當賀	
5	足下			
	小弟		何足掛齒	
6	長兄 小弟			
	小弟	之	何特為之枉駕	
7	足下 小弟			
	小弟 仁兄	這無益之物	何用	
8	足下	我 這大職		
	小弟	此職		
9	足下	此處 這個所在		
	小弟	這些花卉	如何	

「諸般諫勸人說話」

	呼称	代詞	疑問詞	語氣助詞
1	仁兄	這是	何謂	
		這病 他	怎敢不服藥	便了
2		我 你 這都是 因此		
	小弟 自己 仁兄	我 這 那 自此 這裏 這些銀子	誰知 那料	不敢堵了
3	賢弟	我 你 他 其中 那條路 那 從此以後		
	晚生 仁兄	我 他 我們 這 那 那些		了
4		你 這些 之		便了
	先生 小弟			
5		你		

唐話の伝播と変化（奥村）

6		你 他 這幾日 這個田地 如此	甚麼 什麼 怎	了
	小弟 仁兄	他	幾次 那料	
7		我 你 其言 之 ²⁴⁾		
	小弟 仁兄	之 ²⁵⁾		
8		你們 依之看來		
		我 我們		不錯了
9		我 你 此禍		了
	仁兄	我 這禍 這般禍 因此 自此	不知怎樣	
10		你們		
	仁兄	我們 我等 ²⁶⁾ 依之看來	奈何	

「諸般讚嘆人說話」

	呼称	代詞	疑問詞	語氣助詞
1	兄長			
	小弟	我	何足掛齒	了
2	仁兄	如此 若斯		
	小弟 長兄	我 你 這是 因此 之 ²⁷⁾	怎上	
3	先生	如此		
	仁兄	我 這個所在	何足齒及	
4	仁兄			
	小弟			
5	仁兄			
	小弟	我 此言		
6	仁兄	我等		
	小弟	他 只好如此 此言	安敢	
7	仁兄	我們 如此	焉能	
	足下	我 如此 斯		
8	先生	此般好心腸	如何	
	小弟	我 如此		
9	先生			
	老夫	此言		
10	先生	我們		
	老夫 足下等	我 他 此	何德	
11	賢弟	你		
	小弟 自家		何況 怎能	
12	仁兄	如此	怎	
		我 這般	什麼	

24) 引用された易經の言葉である。

25) 同上。

26) 「我們」「我等」はいずれも「我輩」という日本語に対応させており、意味上の区別はない扱いである。

27) 引用された孟子の言葉である。

「書生相會説話」

	呼称	代詞	疑問詞	語気助詞
1	仁兄	你 這幾日	何貴忙	
	小弟	這部書	幾次	
2	仁兄	我		
	小弟 仁兄			
3		我 你 他們 其實	如何	
		我 你	何故 何消	便罷了
4	仁兄	我 他 這		
	小弟	此	怎敢	也
5	仁兄	你 此般大才	多少	
	小弟	我 這件事 如此 依之看來		
6	仁兄	他 那一位		
		我 他 因此	何	
7	兄長	我們 我等	不知怎樣	
	小弟 仁兄	我 如此	甚 安敢	

「與僧家相會説話」

	呼称	代詞	疑問詞	語気助詞
1		這幾日		麼
	貧衲			
2	和尚	這一向		
	居士 野衲			
3	師父	我		麼 了
	居士	他		
4	法弟		不知怎生	
	居士	你	甚	了
5	和尚			
	老僧			了
6	和尚		甚	
		我 他們 這 這個 這些 那 因茲 此去彼來	幾次 那能	

代詞、疑問詞、語気助詞を必要とせずには会話が成り立つ場合も当然あるため、上の表の空欄にはこだわらず、使用されている語彙にのみ注目すると、『唐話纂要』の長短話には用いられていない「僕」「安」の2語が用いられてはいないが、大きな違いはないと言え、岡島冠山の唐話に対する認識が、会話という形式においても使用される語彙においても、『唐話使用』の会話文に維持されていると捉えることができる。いっぽうで、代詞、特に人称代詞の使用は、個々の会話によって大きく異なるということ、目上から目下へは「你」を用いても、目下から目上へは用いられていないことが顕著な点である。

3. 目標とされた唐話

唐話は、唐通事の口頭の中国語であり、長崎の中国人と日本人という限られた人々との会話で用いられたものであったが、岡島冠山が訳社の講師となり『唐話纂要』や『唐話使用』を編纂、出版したことによって唐話を話そうとする日本人が新たに生じた。

唐通事が唐話を学ぶ目的は、職責を果たすためであった。また、彼らは自らが目指すべき唐話について、次の言葉を遺している。

你若依我的教法，平上去入的四声，開口呼，撮口呼，唇音，舌音，齒音，喉音，清音，濁音，半清，半濁，這等的字音分得明白後，其間打起唐話來憑你對什麼人講也通得的。蘇州，寧波，杭州，揚州，雲南，浙江湖州，這等的外江人是不消說，連那福建人，漳州人，講也是相通的。他們都曉得外江話，況且我教導你的是官話了。官話是通天下中華十三省都通的。

（『小孩兒』）

唐通事は、どの地方出身の中国人に対しても通じる言葉である官話を学ぶことを旨とした。中国共通の言語である言葉は、中国人が話すと官話と称されるが、唐通事が話すと唐話と称される。しかし、その唐話はすべての中国人に通じるものでなくてはならない、という自負が唐通事にはあったと言える。だからこそ、発音を重視したのである。

それに対して、訳社が求める中国語はすべての中国人に通用するための言葉ではなかった。「崎陽の学」を積極的に取り入れた荻生徂徠ではあったが、唐通事の中国語習得を否定する主張も遺している。

蓋余自敦華音。則稍稍聞崎陽有國先生者。其聲藉甚也。乃意獨以是特譯士師耳。夫崎陽夷夏之交。海舶之所來集。萬貨環奇之湊。而我五方之民。廢居射利者萃焉。爲甲于海內。祇其物產異土。言語異宜。譯士爲政邪。譯士之富。又爲甲于崎陽。夫利之所嚮。聲譽從之。夷焉彈舌是習。沸唇是效。何有乎道藝。華焉明審啞啞。晰喉齒腭。亦何有乎道藝。苟足以立乎龍斷之上。辯知乎異方互市嘔啞之音。是謂之業之成。師以此而爲師。弟子以此而爲弟子。若國先生者。亦唯以此而豪舉乎一鄉也。是何足尚哉。已又從其門人岡玉成游。則稍稍得聞其爲人也。嶽崿岑峯。落落穆穆。視利若汚。聞名若驚。自其童丱。足不躡官府者。五十年一日也。

（『徂徠集』卷之八國思靖遺稿序²⁸⁾）

荻生徂徠は中国語を実用の言葉として学んだのではなく、学問として学んだ²⁹⁾。そうした意識のもとで

28) 近世儒家文集集成第三卷，ベリかん社，1985。

29) 前掲木津2017に、「『崎陽の学』から、徂徠は中国語原典を異言語として理解する方法を学んだ。徂徠が、自覚的に古文辞を模擬再生しようとしたことは、従来「和習」などと呼んで泥んできた日本製の中国語文を否定した上で、改めて他者たる異言語を自らの手中に獲得することを目指した行為であった。」また、「唐通事と徂徠は、肉薄すべき対象を異にはしていたが、異言語の真髄或いは最も生命力のある部分を会得しようとした行為として、同じ時代

学ばれた唐話が、『唐話纂要』の唐話であり『唐話使用』の唐話である。そこには岡島冠山の唐話の運用能力だけでなく、唐話に対する認識も生かされたのであった。

4. むすび

江戸時代、中国語は読まれるだけでなく、話される言葉として広く認識された。唐話は、唐通事自身が述べたように、官話を唐通事が話した言葉のことであった。それが、訳社においては日本人知識人の話す唐話へと変化した。変化しなかったのは、「話す」という行為として受け継がれたという点であり、岡島冠山は唐話の本質というものを、ここに見ていたと考えることができる。つまり、唐話とは会話すなわち話される言葉であるということと、それに伴う音である。語彙が異なっていたとしても、この本質を維持していたからこそ、『唐話纂要』と『唐話使用』は「唐話」の名を冠して世に示されたのだと言えるだろう。

性を有していたと捉え直すことができるかもしれない。」(150頁) とある。